

新富町文化財調査報告書 第 24 集

# 平成 9 年度 町内遺跡発掘調査概要報告書

1998

新富町教育委員会

## 序

本書は平成9年度に実施した町内遺跡の発掘調査の概要報告書です。

富田1号墳は平成7年度から本年度まで3カ年間にわたり部分的に調査され、直径約25mの6世紀に造られた円墳であることが判明しました。市街地にあり小学校に近接する立地にあるため、今後文化財の学習の場となれば幸いです。

上園遺跡はかつて昭和61年から3カ年間にわたって調査された古墳時代の集落遺跡で、今回の調査はその南側に位置します。宮崎県内でも指折りの大集落であったこの遺跡は日向地方の古墳時代の集落構造など宮崎県の歴史を探る上でも非常に重要なといえます。

調査におきましては土地所有者の皆様や関係機関の方々には文化財保護の趣旨をご理解頂き感謝の念に絶えません。

これらの記録として残された資料や出土遺物が学校教育や生涯学習の場で活用され、文化財保護の精神が広く浸透することを望みます。

平成10年3月

新富町教育委員会

教育長 清 郁 雄

## 例　　言

1. 本書は平成9年度に宮崎県兒湯郡新富町で実施した埋蔵文化財の予備調査および本調査の概要報告書である。
2. 調査は主として文化庁の国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」をもとに実施され、本書作成経費もそれによる。
3. 調査の体制は次のとおりである。

○総　　括　清　郁雄（新富町教育長）  
　　図師　勉（新富町社会教育課長）  
　　高正　静夫（新富町社会教育課長補佐兼社会教育係長）  
○庶　　務　山崎　和子（新富町社会教育課副主幹）  
○調整・調査　有馬　義人（新富町社会教育課主事）  
○指　　導　柳沢　一男（宮崎大学教育学部教授・考古学専攻）  
　　飯田　博之（宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係）  
　　甲斐　貴充（宮崎県立埋蔵文化財センター調査第2係）  
○参加学生　藤本貴仁、松尾茂樹、長友俊博、松永幸寿  
○作　業　員　滝口則雄、滝口恵美子、岩下ヨシ子、野尻富子、日野君代、杉尾美千子  
　　新恵トシ子、大原一彦、日野仁美、小守容子  
　　宝崎忠昌、倉永喜、吉野大、土屋信好、河野隆子、出井クニ、江口栄子  
　　宮ヶ中千穂

4. 発掘調査期間はそれぞれ本文中の表1に明記している。
5. 本書の執筆・編集は有馬がおこなった。
6. 本書で使用される図面の構成は有馬、甲斐、藤本、松尾、小守、長友が行い、トレースは長友が図3を、ほかは有馬が行なった。
7. 本書で使用する方位は図3が磁北である。
8. 調査関連資料および出土遺物はすべて新富町社会教育課が一括保管している。

## 本　文　目　次

第1章　はじめに	1～6ページ
第2章　富田1号墳（第3次）	7～9ページ
第3章　上菌遺跡I地区	10～18ページ
図　版	19～22ページ

# 第1章 はじめに

## 第1節 新富町の位置と現況

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に面し県庁所在地である宮崎市から約20km北に位置している。北西部から南東部にかけては一ヶ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90mの台地面にかけて町域を有する。

隣接する市町村は西に西都市、北に高鍋町、南に佐土原町で、町域は南北約7km、東西約9km総面積が約61km<sup>2</sup>である。

主幹産業は酪農や園芸を中心とした農業であり台地の中央部には自衛隊新田原基地があるため「やさいと基地の町」というイメージが強い。

町の人口は平成8年4月現在で18,053人であるが、近年の道路交通網の整備にともない宮崎市への通勤時間が短くなったことや宮崎市周辺の不動産価格の高騰により、本町での宅地開発が活発となつたため人口も緩やかな増加傾向にある。

## 第2節 地理的環境

新富町が位置する宮崎平野は九州でも筑紫平野に次ぐ平野面積があり、なかでも台地の占める割合が高い。これら台地の形成は第4紀中期更新世初頭（70万年前）からの九州山地の隆起に始まり、氷河期と間氷期の連続による気候の変化が海平面の上昇・下降による土砂の堆積・侵食をよび著しい段丘化が進行していった。

現在の段丘面は大きく11面に区分でき古い順に、椎原面、久木野面、茶臼原面、三財原面、新田原面、西都原面、豊原面、大淀面、国富面、三日月面、完新世段丘面と呼ばれる<sup>1)</sup>。これらのうち新富町の台地面の大部分は三財原・新田原面に属し標高70～90mの広大な平地が広がる。

沖積平野部に目を向けると、上記の段丘面が脆弱な部分から開析されて形成される急峻な谷の底部（日置川、鬼付女川流域）と、一ヶ瀬川流域沿いの低位段丘面、海岸部の4～5の砂丘列に区分でき、それぞれ有効な土地利用を可能としている。

## 第3節 歴史的環境

### ① 旧石器時代

遺跡の分布は新田原台地上が多く縄文時代草創期の遺物を含む。発掘調査された遺跡は4箇所と少なくいずれもアカホヤ層下から集石遺構にともなって遺物が出土した例が多い。

町内最古の例としては溜水遺跡で出土したナイフ形石器があり<sup>2)</sup>、その他の遺跡では細石器が多い。町内では第2オレンジ層下の調査例がないため古い資料が少なく近隣地域で前期～中期の石器が検出される例が増えつつある状況を考えると今後の調査を徹底したい。

ところで町内出土の細石器の多くは1980年代に大野寅夫氏によって本町大字新田字畦原を中心として表採・分類された「畦原型細石器」と呼ばれるもので、南九州を代表する標識資料となっている<sup>3)</sup>。

### ② 縄文時代

これまで5つの遺跡で調査例があり検出された遺構の多くは集石遺構である。時期も旧石器か

ら縄文草創期までが多く前期以降の遺跡は少ない。

集石造構は瀬戸口遺跡で確認された掘り込みをともなうものが大半で、押形文土器、隆起線文土器、貝殻条痕文土器などが出土している<sup>14)</sup>。現在のところ集落や生活形態を復元できるまでの資料が少ない。

### ③ 弥生時代

前期の遺跡例に板付Ⅱ式併行期の壺が表採された今別府遺跡がある<sup>15)</sup>。この遺跡と同様に前期から中期前葉までの集落は、日向灘に面した砂丘列上や台地端部そして河岸低位段丘面に営まれた例が多い。日向地方の稻作開始期にあたるこの時期の水田經營は河川流域にありながらも灌漑技術の未成熟さから谷地からの湧水を利用した小規模なものが予想される。

中期後葉から後期になると集落の立地が内陸化する傾向にある。新田原遺跡では竪穴住居12軒が谷地形を挟んだ微高地にあり湯之宮遺跡などはさらに内陸に位置する。この時期の土器には瀬戸内地域との活発な交流を示す影響が認められ、それらの交流から刺激された在地的な花弁状住居が出現する時期もある<sup>16)</sup>。

後期から終末期の集落は調査例が少ない。しかしながら風早遺跡<sup>17)</sup>の灌漑施設やその周辺の遺物の流入などから谷部を中心に水田經營を進めていた状況が想定でき、方形周溝墓・円形周溝墓を含む195基の土墳墓が発見された川床遺跡<sup>18)</sup>では西日本全域に及ぶ広域的な交流が予想される。

### ④ 古墳時代

前期の遺跡として海岸部の丘陵上に立地する下屋敷古墳がある。墳丘は前方後円形を呈し内部主体が組合せ式木棺の日向地方でも最古の古墳と推定されている<sup>19)</sup>。集団の墓域である川床遺跡とは単独で立地し埋葬者が単体であるなど、被葬者の集団内での階層的差異が見られる。

やや時期がくだって山之坊古墳群、塚原古墳群、祇園原古墳群では墳丘50m以下の中小規模の前方後円墳が継続して築造されるようになる<sup>20)</sup>。ところで前期の一つ瀬川流域には西都原台地を中心として多くの首長墓が存在する。これらはそれぞれのグループを圧倒する規模ではなく、特に西都原台地上では複数の系列が台地上を共有して造墓活動をおこなっている<sup>21)</sup>。町内の古墳群も同流域の一勢力と理解できる。集落には山之坊古墳群と近接して銀代ヶ迫遺跡があり住居7~8軒で集落を構成しているが<sup>22)</sup>前方後円墳を築造しする首長層の集落とは考えがたい。

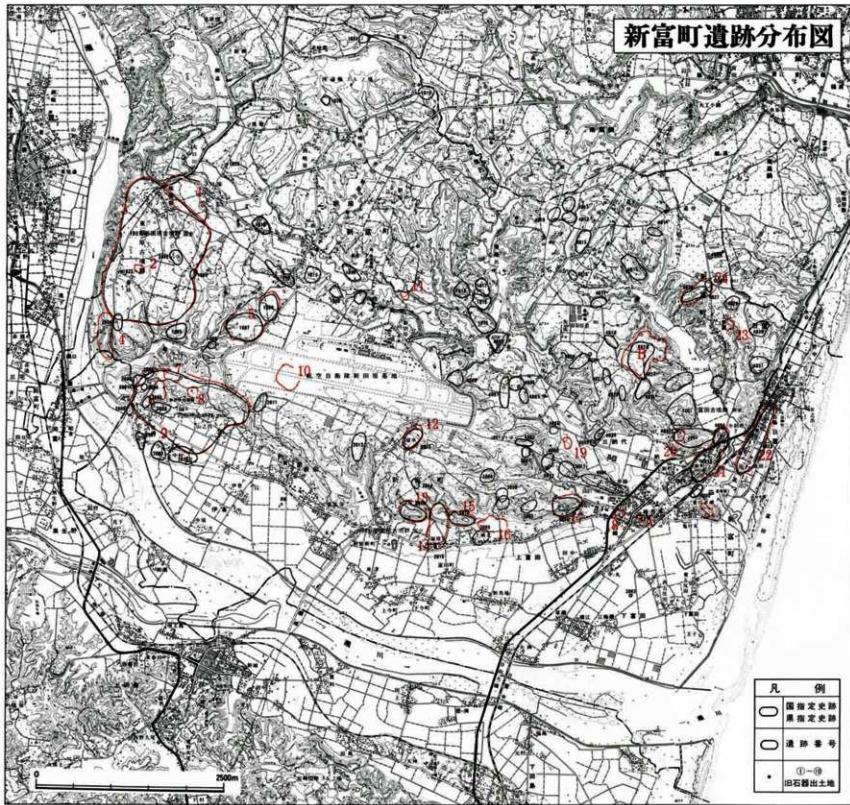
中期になると西都原台地上に女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳が登場し、同時に一つ瀬川流域を含む日向地方全域において古墳群規模の拡大や縮小ないし断絶が認められる。このことは日向地方の首長層の再編を意味し両古墳の被葬者が日向地方全域の盟主となつたことを想定させる<sup>23)</sup>。

町の北西部にある祇園原古墳群はこの変動以後に前方後円墳が継続して築造された日向地方での最大規模の後期古墳群である<sup>24)</sup>。同様に6世紀に継続して築造される大淀川流域の下北方古墳群と拮抗しつつやや優位な関係を保ち終末期に至つたようだ。

一方、町の東部台地上には上薦遺跡で集落が形成される。現在町内で確認される5世紀後半から形成される集落はここのみで300軒以上の住居が確認されている<sup>25)</sup>。また集落の縁辺や丘陵上には円墳や横穴墓が群集し集落と墓域の関係を推定できる貴重な事例である。

### ⑤ 古代～中世

上薦遺跡は14世紀頃まで営まれた集落で、町南部の沖積段丘面には古墳時代後期から中世の住居が確認された北田遺跡がある<sup>26)</sup>。しかし町内を含む一つ瀬川流域の古代から中世の集落については資料が少ない。



○ 平成 9 年度調査対象道路

- A. 富田 1 号墳  
B. 上南道路 I 地区

○ 主要な道路

- |             |            |           |
|-------------|------------|-----------|
| 1. 川床道路     | 11. 湯之宮古墳群 | 21. 今別府道路 |
| 2. 潘戸口道路    | 12. 渓水道路   | 22. 中伏道路  |
| 3. 犬岡原古墳群   | 13. 竹ヶ山城   | 23. 上日置路  |
| 4. 有峰城      | 14. 塚原古墳群  | 24. 藤掛道路  |
| 5. 新田原道路    | 15. 富田城上ノ城 |           |
| 6. 銀代ヶ追道路   | 16. 北田道路   |           |
| 7. 八幡 1 号道路 | 17. 富田城下ノ城 |           |
| 8. 七又木道路    | 18. 下屋敷古墳  |           |
| 9. 山之坊古墳群   | 19. 屢早道路   |           |
| 10. 石船古墳群   | 20. 鎧道路    |           |

第 1 図 平成 9 年度発掘調査位置図

古代の文献上では「倭名類聚抄」(935年)のなかに児湯郡8郷（三納・穂北・大垣・三宅・觀嶽・韓家・平群・都野）があるが現在の新富町に該当する郷はわからない。

その後『日向国図田帳』(1197年)のなかに「湯宮・倍木・新田・下富田・宮頭」の地名が登場する。これらの地は莊園として領有されていたが古代以前から開発され農地を拡大した村々の姿が想像される。

南北朝時代になると関東からの武士や在地豪族の横領などの混乱が続いたようだが、伊東義祐の全盛期には富田城周辺が外城の一つとして支配地の重要な位置にあった。

その後島津氏が伊東氏を追いやり支配するが、羽柴秀吉の九州進出によって現在の日置・三納代・上下富田地区が秋月高鍋藩に、新田地区が島津佐土原藩の領地となった。

この時期の集落は山城を中心に集住したものが多く、その周辺に「麓」や「城元」などの地名が残る。また町内で確認される中世山城は8箇所である。

#### ⑥ 近世以降

近世においての新富町はそれぞれ別個の藩の支配を受けたため慣習の相違が現在でも見受けられる。

江戸終末から明治初頭における現在の新富町域の人口は約6,000人弱であった<sup>11)</sup>。明治以降に現在の人口になったのは、全国的な人口増加以外に台地上の開拓による入植が理由として上げられる。また行政区域は明治22年に新田村・伊倉村が合併して新田村に、日置村・三納代村・上富田村・下富田村が合併して富田村になる。そして戦後の昭和34年に新田村と富田村が合併して新富町になった。

### 第4節 平成9年度の開発行為の動向

町内での開発行為の動向は民間・行政ともに増加傾向にある。

地方公共団体の事業では道路網の整備が上げられる。東九州縦貫道建設予定区間が決定し児湯郡内に到達するに従って、周辺アクセス道の整備計画が多数予定されている。路線改良・拡幅が計画されるもので「県道木城西都線」「県道南高鍋線」などがある。

農業関連整備では平成7年度の一つ瀬土地改良事務所の事業終了によって大規模整備が一区切りされた感があるが、用排水路や農道整備のほか個人による畠地の土壤改良（天地返し）などで規模の大きいものがある。

土地区画整理事業では富田地区の市街地区画整理が最終段階に入り、県指定史跡「富田村古墳1号墳」の擁壁設置についての調査のほか、北区の整理事業により独立丘陵部の平地化が計画されている。

民間の開発行為では宮崎市や佐土原町の不動産価格の高騰により町内での宅地造成が多發している傾向にある。それらには小規模な宅地分譲が多く海岸から台地上へと点在する。

ほかに多いもので土砂採取がある。これらの土砂は工事用埋土として利用され本町から高鍋町におよぶ丘陵の端部で採取され、県内シェアのうちの7割を占めるようである。また跡地は産業廃棄物処理地への利用など多岐にわたり工事計画が未定な場合が多い。

以上のように町内では行政と民間のいずれにおいても小規模開発が分散的に実施される傾向がある。教育委員会では1982年に「遺跡詳細分布調査」を実施して既に20年近く経過し、当時の分布調査の成果では対応できないことが多い。今後は周知外の遺跡の分布調査を徹底し遺跡の周知

化を行いたい。

本年度は2件の本調査を行なっている。1つは土地区画整理事業にともなう擁壁設置が計画される富田1号墳の周辺調査で周溝外の遺構を記録保存するのが目的であった。

いま一つは民間の畠地の土壤改良とともに上薙遺跡の記録保存調査である。

特に上薙遺跡では調査期間が3ヶ月以上におよび、その間に他の緊急調査が対応できないことが多かった。今後の反省点とし体制充実に努めたい。

表1 平成9年度 町内遺跡調査一覧

番号	遺跡名	周知有無	遺跡年代	調査原因	原因者	調査内容	調査主体	調査期間
1	富田1号墳	周知	弥生～古墳	土地区画整理	町	本調査	町	H9 5/12～6/13
2	新田原59号墳	周知	古墳	史跡整備	町	現状調査	町	H9 7/14～8/31
3	上薙遺跡I地区	周知	古墳～中世	土壤改良	富岡製茶	本調査	町	H9 10/1～12/30
4	頭田遺跡	周知	弥生～中世	河川改修	県	本調査	県	H9 12/～12/25
5	新田原58号墳	周知	古墳	史跡整備	町	確認調査	町	H10 1/8～3/31

調査内容は次のとおりに区分した。

①予備調査：分布調査＝遺跡の範囲を確認するもの。現状調査＝現状の地形など測量するもの。

試掘調査＝遺跡の有無を確認するため部分的なもの。

確認調査＝遺跡の内容を確認するための部分的なもの。

②本調査：遺跡の内容を記録として残すための全面的なもの。

### 【注】

- (1) 長岡伸治「後期更新世における宮崎平野の地形発達」『第4紀研究』25-3 1986  
早田 努「三 宮崎平野の地形発達史」『宮崎県史』通史編 原始古代 1997
- (2) 吉本正典「溜水遺跡」『新富町文化財調査報告書』第18集 1995
- (3) 茂山謙・大野虎男「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第3号 1977
- (4) 日高孝治「瀬戸口遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集 1986
- (5) 有田辰美「新富町の埋蔵文化財」『新富町文化財調査報告書』第1集 1982
- (6) 石川悦雄「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集 1986
- (7) 有田辰美「風早第I・II遺跡」『新富町文化財調査報告書』第14集 1992
- (8) 有田辰美「下屋敷古墳」『宮崎県史』資料編 考古2 1993
- (9) 有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第5集 1986
- (00) 有馬義人「5 新田原古墳群」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』 1997
- 01 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号 1995
- 02 近藤 協「銀代ヶ迫遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集 1992
- 03 注11文献
- 04 注10文献
- 05 谷口武憲「上薙遺跡F地区」『新富町文化財調査報告書』第18集 1995
- 06 有田辰美・有馬義人「北田地区遺跡」『新富町文化財調査報告書』第17集 1995
- 07 黒木正文「第1章 行政 第1節 六村時代」『新富町史』通史編 1992

## 第2章 富田1号墳

### 第1節 位置と周辺遺跡

町東部は鬼付女川、日置川が流れる段丘谷がそれぞれ南東部に開けている。さらにこれら段丘谷では台地面を抉るように小谷が派生し複雑な丘陵状の地形を形成している。

富田古墳群は大字上富田、三納代、日置に点在する古墳群の総称で上記の段丘谷を挟んだ丘陵上に分布し、そのまとまりから3つのグループ（A～Cグループ）に大別できる。

Aグループは富田地区の台地面から観音山までの丘陵上に分布する古墳群で、その範囲は南北1.2km、東西2.5kmに及ぶ。古墳時代初頭の下屋敷古墳や古墳時代後期の1号墳があるがBグループに比べると数が少ない。現在の新富町役場がある平坦地はかつて丘陵の造成地でその斜面には横穴墓があったとされるが詳細は不明。西の台地面には近接して塚原古墳群がある。

Bグループは上薙遺跡を中心に周間に密集した古墳群である。上薙遺跡は古墳時代中期から中世までの住居跡300軒以上が検出され、特に古墳時代後期から古代にかけての住居が多い。この集落を中心に丘陵上や台地面に古墳が多くあり分布範囲は東西1.5km、南北2kmに及ぶ。このうち調査された古墳には北原牧遺跡、蔵薙遺跡、鎧遺跡、隅ヶ迫横穴墓群、比良横穴墓群があり5世紀中頃から7世紀にかけての墳墓群である。

Cグループは高鍋町永谷地区から本町上日置地区にある古墳群をさす。現在の行政区域では高鍋町との境界にあり、その多くが「高鍋村古墳」として指定され新富町分はやや離れて1基のみ現存するため、あるいは永谷古墳群と呼称すべきかもしれない。横穴墓と小円墳がある。

富田1号墳はAグループに属し、径約25mの円墳である。

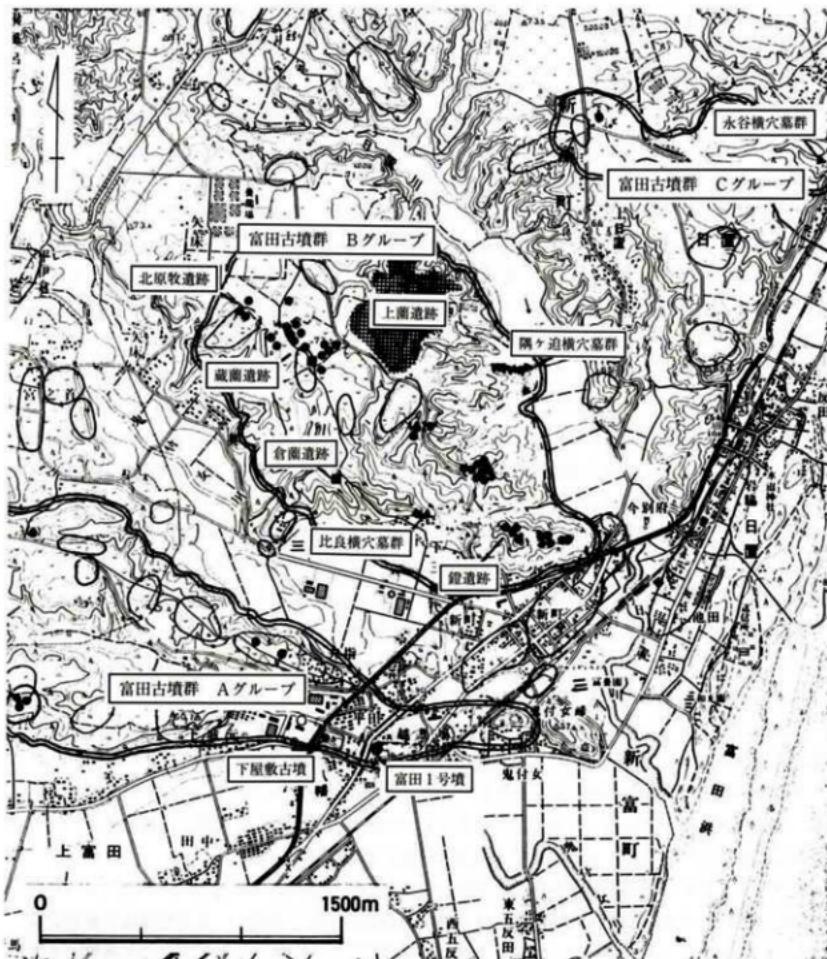
### 第2節 調査の経緯

「富田村古墳」（富田古墳群の指定名称）は昭和10年に県指定史跡に指定されている。指定当時は古墳の所在する地区は富田村でありこの村内にあった古墳を一括して指定している。

1号墳は富田八幡神社の境内地にあり指定措置は八幡神社所有の土地一筆全体に行なわれている。墳丘は社殿より一段高い平坦面にありもともとは西から東へと続く丘陵上にあったが、区画整理によって地形の旧状が失われ現在では島状の独立丘陵に見える。

平成7年5月に町都市計画課から教育委員会に土地区画整理事業時の同墳の取り扱いについて協議があった。内容は①神社境内地のうち古墳がある場所を町で買収し、区画整理後の緑地公園にしたい、②墳丘の近くまで削平された箇所は地山が露頭し、危険な状態であるため擁壁が必要であるの2点である。

町教育委員会では県文化課と協議し現状変更を加えて同年9月から墳丘の規模と周溝の位置を確認するため発掘調査を実施した。調査の結果、同墳は径約25mの円墳で、幅2m・深さ0.5mの周堀が巡り、出土した須恵器から6世紀代の築造が推定されている（第1次調査）。平成8年度になって②について検討され、墳丘崩壊回避と危険防止の観点から擁壁設置を遺存する周溝外で対応することとなり設置位置を決定するための試掘調査を行なった（第2次調査）。本年度の調査は擁壁設置工事にともない削平される部分についての本調査である（第3次調査）。

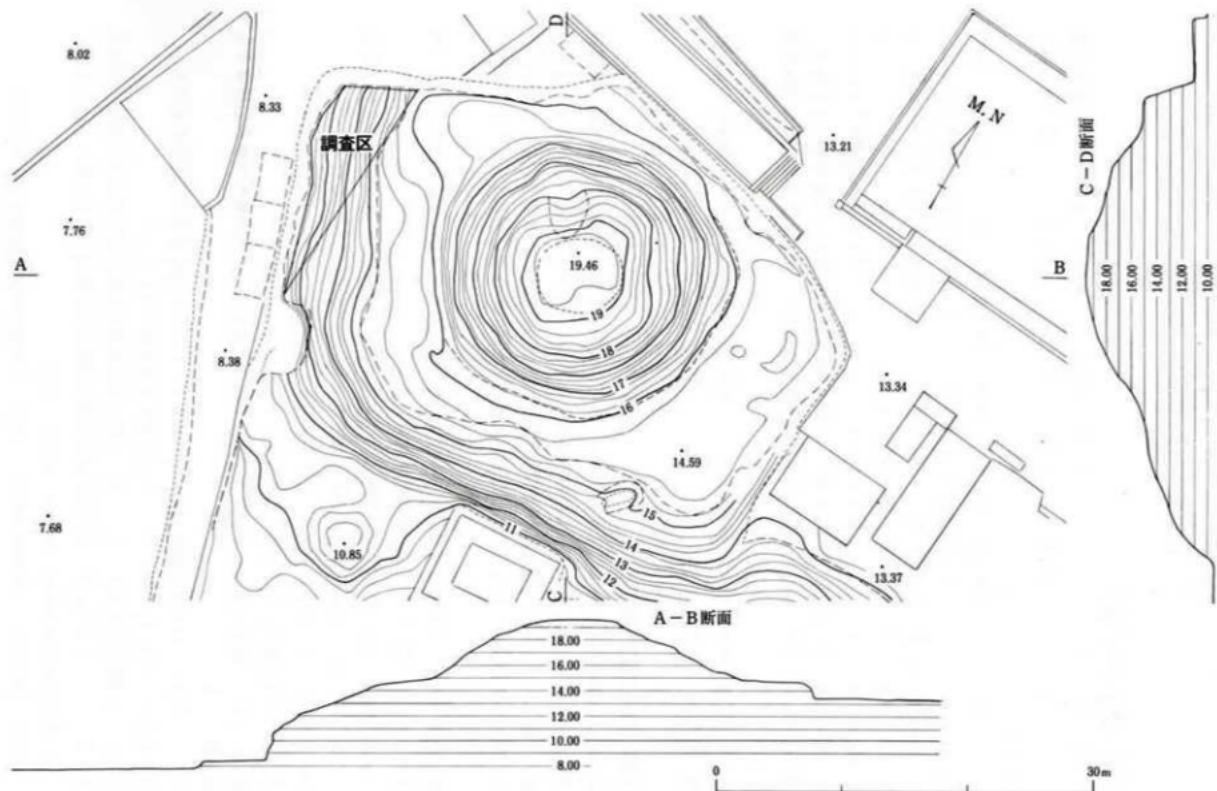


第2図 富田古墳群分布図

### 第3節 調査の結果

擁壁設置により掘削される箇所を図3の範囲で調査した。今回の調査区では周溝外の古墳造成痕跡や前時代遺構の存在を想定していたが、遺構については自然面のみと思われる。

ただ遺物として弥生土器の底部が一点出土しており古墳造成前の丘陵上の土地利用が考えられるため今後の調査で注意したい。



第3図 富田1号填調査区図

## 第3章 上菌遺跡Ⅰ地区

### 第1節 位置と周辺遺跡

町の東部台地面は東に向かって開けた2つの谷で開析され、それぞれに鬼付女川、日置川が流れている。海岸部には南北に続く数列の旧砂丘があるため、2つの河川はこれらを避けて南進し日向灘に流れ入る。

2つの谷の縁辺はさらに開析された小谷を有し複雑な丘陵状を呈している。これら小谷の周囲には溜池があることが多く、大規模灌漑が不可能であった近世以前はこの水源が有用であった。

このように海岸部の砂丘列上に位置し、湧水を起点とした湿田経営が可能であるこの地域では県内でも早くからの弥生時代の生活痕跡が散見できる。

上菌遺跡はこれら2つの谷部を一望できる台地上にある。周辺の弥生時代の遺跡としては砂丘列上の今別府遺跡、園田遺跡、鬼付女西遺跡、中伏遺跡があり、台地上には鐘遺跡などがある。

古墳時代には風早遺跡、観音山遺跡、北田遺跡、藤掛遺跡などがあり、数多くの集落遺跡が認められる。

このような立地と環境が県内最古の古墳である下屋敷古墳を造営し、やがて上菌遺跡のような大集落が形成された基盤を培ったと思われる。

### 第2節 既往の調査概要

上菌遺跡は古墳時代から中世に至る集落遺跡である。集落の範囲はおおよそ標高70mの等高線上にあり、西は南北に走る谷によって西側台地面と分断され、北と東は急崖、南は丘陵である。

南側の丘陵上には小円墳や横穴墓が数多く密集し、谷を挟んだ西側台地面も同様に墓域が広がることが昭和62年の調査で判明しているため、居住域と墓域が明確に分かれていることが推測される。

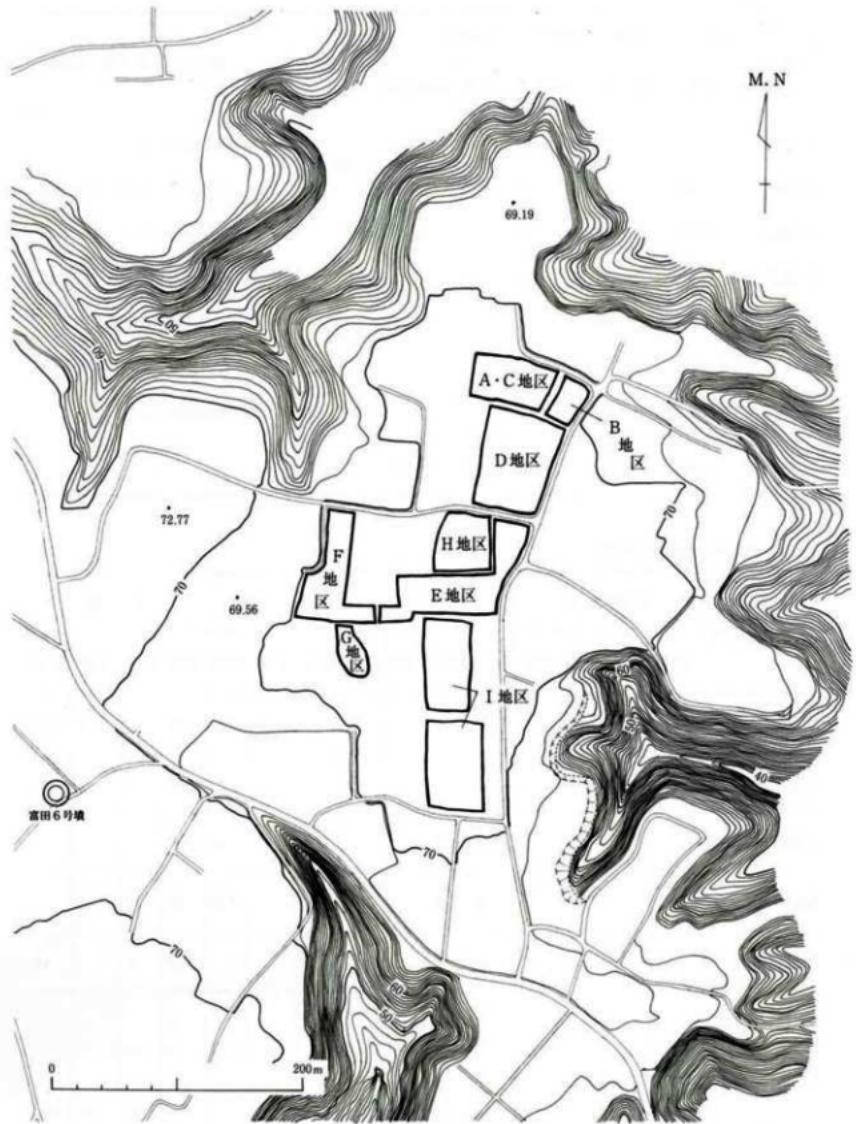
本遺跡を含むこの台地面では昭和61年からは場整備が実施されており、この工事にともない町教育委員会で3ヵ年間にわたって発掘調査を実施してきた。

その結果、約14,700m<sup>2</sup>の調査区から300軒以上の竪穴住居のほか掘立柱建物や溝状遺構が検出され、古墳時代中期から14世紀にわたる複合遺跡であることが判明している。

本遺跡の特筆すべき点をまとめると、以下のとおりになる。

- ①県内でも希有な長期にわたる複合遺跡であること。
  - ②集落に近接して墓域があるため、古墳や横穴墓に埋葬された人々の階層性が集落の構成からも考慮できること。
  - ③出土した土器から宮崎平野部の古墳時代から古代にわたる土師器編年が可能であること。
  - ④墨書き土器などの出土から古代においては官衙的要素も認められること。
- 以上のような問題点が指摘できる。しかしながら発掘調査から既に10年が過ぎた現在も整理作業と報告書の刊行がままならず、また発掘調査面積は遺跡全体の面積のうち2割にも満たないため、今後の整理作業と発掘調査の徹底が必要されてきた。

図4に既往の調査区と今回の調査区を示し、表2・3で既往の調査成果をまとめている。



第4図 上薗遺跡調査区図

表2 上古遺跡の既往の調査概要

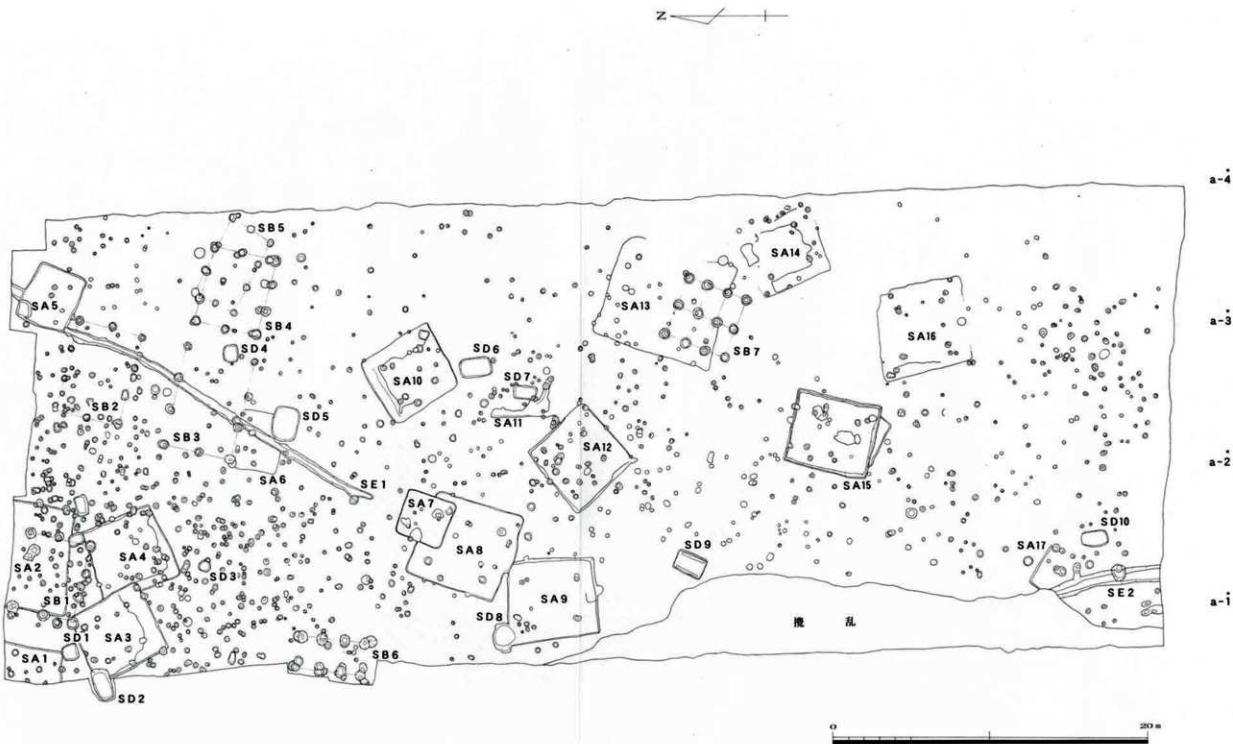
調査区	面積:m <sup>2</sup> (概数)	遺構(古墳時代～中世遺構を一括)				調査期間	調査者	報告書(正報告)
		竪穴住居	掘立柱建	土壙	溝状遺構			
A・C地区	1,408	45	2	6	7	S61 11/6～2/24	有田辰美	未
B 地区	883	13	3	1	2		有田辰美	(1/3のみ)第19集
D 地区	4,000	98	3	2	6	S62	有田辰美	未
E 地区	3,000	89	4	2	6	S62	長津宗重	第19集、第23集
F 地区	2,776	23	10	1	16	S62	谷口武範	第18集
G 地区	約1,000	2				S62	有田辰美	未
H 地区	1,600	32	5	7		S63 7/25～9/10	有田辰美	未
計	14,667	302	27	19	37			

表3 各地区検出遺構の内訳

面積(m <sup>2</sup> )	古墳時代				古代				中世				不明			
	竪住	掘立	土壙	溝状	竪住	掘立	土壙	溝状	掘立	土壙	溝状	竪住	掘立	土壙	溝状	
A・C	1,408									1		45	2	5	7	
B地区	883	10										3	3	1	2	
D地区	4,000				3	3	2					6	95			
E地区	3,000	74			4	2						6	11	2	2	
F地区	2,776	17	1	1	2	1			9			5				14
G地区	約1,000											2				
H地区	1,600	30			2	4	7		1							
計	14,667	131	1	1	2	10	9	9	10	1	12	161	7	8	23	

※以上の遺構数は新富町文化財報告書第6集、7集、9集(以上概報)、19集、20集をもとに作成した。

本報告がない地区では実数が変更される可能性がある。



第5図 上薗遺跡I地区 北区遺構分布図 (1/240)

a-6

Z —————

a-5

地  
図

SA26

a-4

SA25

SB9

SB8

SA29

SB13

SB12

SA28

SB11

SB14

SB15

a-3

SA24

SA23

SA22

SA21

SA19

SA20

SB17

SA18

SE2

SA30

地  
図

a-2

SB16

a-1



第6図 上園遺跡I地区 南区遺構分布図 (1/240)

### 第3節 調査の経緯

遺跡のある台地は水はけのよい火山灰土壤であることや、谷で囲まれているため霜が降りにくくことから茶の栽培が盛んである。

平成8年3月に町内の茶園業者から畑の土壤改良計画が照会された。施工地は約12,000m<sup>2</sup>の畑2枚分で、植えてある茶を伐根し水はけを良くするため2m以上掘り返す予定であった。

予定地は以前の場整備では施工地に入らなかったため、掘削により遺構に影響があることは明確であったため、町教育委員会では県文化課と協議のうえ記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

調査は茶の収穫が終わる9月頃から開始し12月末までに終了することとした。

### 第4節 調査の方法

約12,000m<sup>2</sup>の施工地は上薦遺跡の南部にあたる。調査地は以前の調査から数えて9番目にあたるため「上薦遺跡I地区」とした。畑は南北に長く、中央には東西にわたって作業道がある。この道を挟んだそれぞれの畑を北区、南区と仮称し、茶の伐根と表土の除去を同時に実施した。

バックフォーで表土を除去したところ、調査区全域の東側は既に1m以上が深耕されており調査対象から除去してここを土置場にした。

地権者の話では昭和40年代に個人で整地を行なつたらしく、アカホヤ面は既に削平され、特に北区南側では遺構の依存状況が極めて悪かった。

表土を除去したのち作業道を中心線とし、調査区全体に9mグリッドの杭を設定した。

夏の晴天下では地山が乾燥し遺構が不明確になることから、遺構面を精査し遺構が検出されたら即座に石灰でマーキングを行なった。

遺構は1/20縮尺で実測し、図面を作成した。写真は中盤カメラで撮影し、35mmカメラでこれを補助した。調査区の全景は株式会社スカイサーベイに撮影を委託している。

### 第5節 調査結果

今回の調査で検出された遺構について概要をまとめた。工事予定面積のうち調査面積は約6,000m<sup>2</sup>である。検出された遺構は5世紀中頃から中世までと多岐にわたる。

竪穴式住居は合計35軒で、古墳時代が10軒、古代が5軒ある。総数35軒のうちの3軒は埋甕と主柱穴のみで、古代の5軒のうち2軒は竈があるもの、2軒は埋甕がある。北区の南側の竪穴住居は攪乱が激しいためプランが明瞭ではない。

掘立柱建物は合計17軒で、古代が6軒、中世が8軒である。古代のものはすべて北区の北側に並んでおり、6軒がほぼ同じ方位を向いている。柱痕跡が検出できたものは2間×3間のものが多く、短辺が4m25cmと規格も近似する。7号掘立柱建物は倉庫に類するものと思われる。

一方、中世のものは南区の西より並んだもので古代のものより掘り方の直径が小さい。規格もすべてに掘り方が並ぶものではなく、不均一な印象を受ける。14号掘立柱建物には扉がある。

溝状遺構は2条あり、古墳時代が1、中世が1である。

土壙は合計10基検出されたが1号、6号、7号からは古錢が出土しており、特に6号は土師皿が供献された土壙墓である。北区の土置場から鉄刀が検出されており、これに属するものかもしれない。

調査区全体では1700のピットが検出され、特に北区北側が密集している。これらの多くは中世の掘立柱建物や柵列の類と推定されるが、その並びについては不明である。

5・6図は調査区の全図であるが、北側に遺構が密集し南側が閑散としているため今回の調査区が上菌遺跡の南端に近いことがわかる。

これまでの調査から古墳時代の集落の中心はE地区からD地区の間であることが分かり若干北側台地面よりであることが推定できると思う。

今回の調査内容については現在整理作業中であるため以上の概要に止めるが、これまでの調査と一緒に報告書としてまとめる予定である。

表4 上菌遺跡I地区検出遺構一覧

	竪穴式住居	掘立柱建物	土 墓	溝状遺構	ピット
古墳時代	18		1		
古 代	4	6		1	
中 世		8	2	1	
時期不明	12(4)	3	7		1700
合 計	34	17	10	2	1700

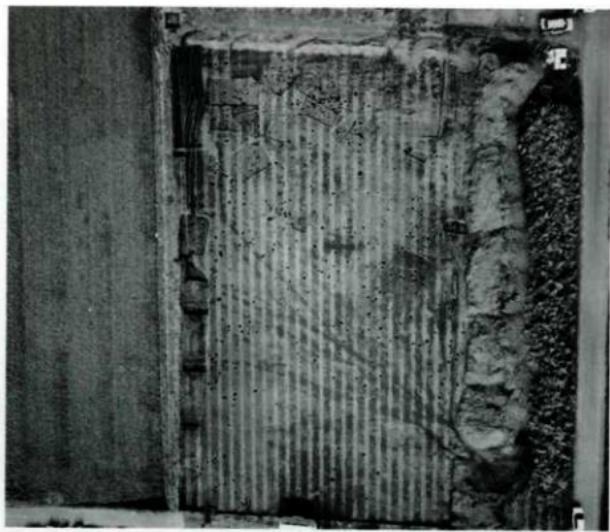
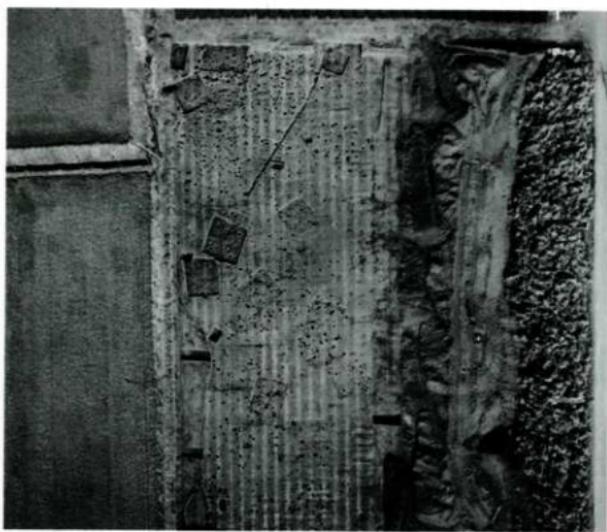
※ 竪穴住居の時期不明分には埋甕のみが検出されたものも含む。( )内がその数。



図版1 富田1号填遠景（西から）



図版2 富田1号填調査区（西から）



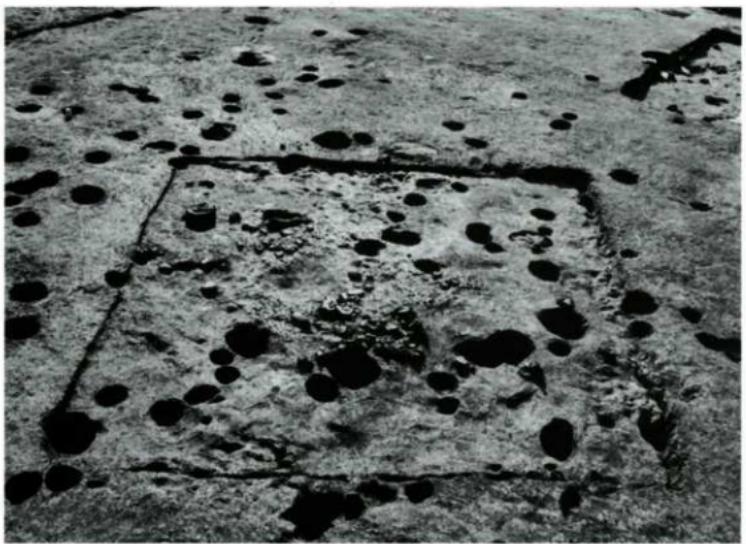
圖版 3 上舊遺跡 I 地區全景



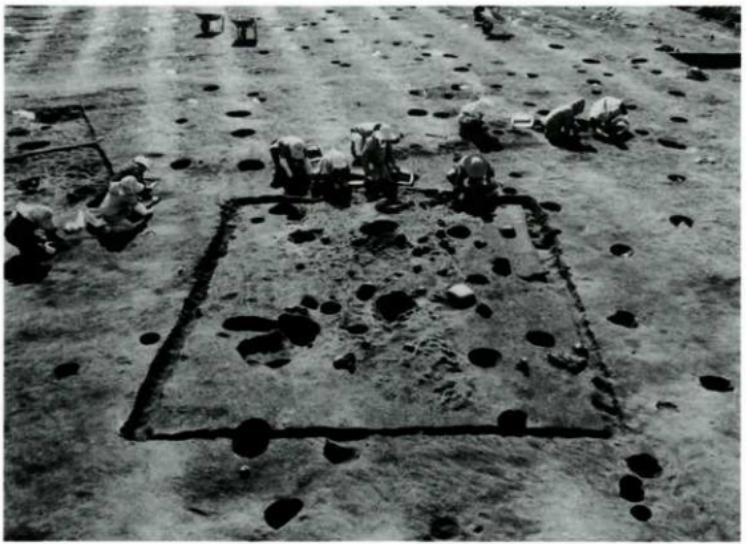
図版4 上菌遺跡Ⅰ地区 3号～5号掘立柱建物



図版5 上菌遺跡Ⅰ地区 4号掘立柱建物柱痕跡



図版6 上菌遺跡I地区 12号竪穴住居（北東から）



図版7 上菌遺跡I地区 15号竪穴住居（北から）

# 報告書抄録

ふりがな	へいせい ねんど ちようないいせきはつくつちょうさかいようほうこくしょ					
書名	平成9年度 町内遺跡発掘調査概要報告書					
副書名						
卷次						
シリーズ名	新富町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第24集					
編著者名	有馬 義人					
編集機関	新富町教育委員会					
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地					
発行年月日	1998年 3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市 町村	遺跡 番号			
富田1号墳	新富町大字上富田字 越馬場	47	1031	970512 ↓ 970613	60m <sup>2</sup>	区画整理 事業
上菌遺跡I地区	新富町大字日置字 北原牧ほか	47	4020	971001 ↓ 971230	6,000m <sup>2</sup>	土壤改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
富田1号墳	古墳	古墳時代	古墳の周溝	土師器・須恵器・石錘		
上菌遺跡I地区	集落	古墳～中世	堅穴住居 掘立柱建物	土師器・須恵器・鉄劍		

新富町文化財調査報告書 第24集

**平成9年度 町内遺跡発掘調査概要報告書**

発行年月日 1998年3月

発 行 宮崎県新富町教育委員会

印 刷 (有)印刷センタークロダ